絲綢之路

シルクロード

S I L K R O A D

2018-夏

No.87

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。

緑韻醍醐三宝院 2004年

【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

公益財団法人
文化財保護・芸術研究助成財団
FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

ウワダン、シンゲッティ、ティシット及びウワラタの古い集落

（モーリタニア・イスラム共和国）

ユネスコ世界遺産（文化遺産）シリーズ　©UNESCO

サハラ砂漠の西端に位置するここにあげた四つの隊商都市は、サハラ砂漠を横断する隊商の交易・イスラム教の宗教中心地として、十一～十二世紀に基礎が築かれた。これらの集落は、モスク周辺の狭い道路沿いに家屋やパティオを密集させ、十二～十六世紀に築かれた都市機能を保持させてきた。交易による莫大な富がそれを維持してきたのである。

（一九九六年に文化遺産として登録）

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

巻頭言

子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓（ひら）く！

――国際子ども図書館の仕事

今年四月に国立国会図書館国際子ども図書館長に就任した寺倉憲一です。国際子ども図書館といっても御存知ない方もいらっしゃるでしょう。せっかくの機会ですので、この場を借りて何をしているところなのか御紹介させていただきたいと思います。

国際子ども図書館は、上野公園の東京国立博物館と東京藝術大学の間の一角にあります。もともと明治三十九年（一九〇六）に帝国図書館として開設され、第二次世界大戦後は国立国会図書館の支部上野図書館となっていましたが、国立国会図書館法の改正により、平成十二年（二〇〇〇）一月に国際子ども図書館として生まれ変わりました。この背景には、当時、深刻な子どもの読書離れが指摘され、国立の児童図書館建設の機運が高まったことがあります。超党派の国会議員から成る「国際子ども図書館設立推進議員連盟」（現「子どもの未来を考える議員連盟」）を始め、全国の児童書関係者の熱心な御支援・御尽力により設立が実現しました。設立年である平成十二年は、国会の衆議院・参議院両院の決議により「子ども読書年」となり、翌平成十三年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」も制定されています。その後、閲覧室や書庫が手狭になったことから、平成二十七年（二〇一五）に新館を増築し、現在は旧帝国図書館の建築を改修した旧館（レンガ棟）と、新館（アーチ棟）の二つの建物でサービスを行っています。

こうして設立された国際子ども図書館は、「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く！」という理念の下、三つの基本的役割を担っています。

第一に、児童書の専門図書館として、国内外の児童書やその研究書等を収集・保存し、研究者、図書館・出版関係者等の利用に供するほか、関連する研修、講演会を実施するなど、子どもの読書推進に関わる全国の様々な活動を支援しています。ここで重要なのは、これが大人に対するサービスであるという点です。児童図書館というと、子どもを対象とするサービスを真っ先に思い浮かべがちです。しかし、国立図書館としては、来館する近隣の子どもだけでなく、全国の子どもたちの読書活動を支援する責務があります。そこで、子どもの読書活動推進に携わる全国の大人を支援することにより、間接的に全国の子どもたちに図書館サービスを届けようという考え方をとっているのです。

第二に、子どもと本のふれあいの場として、子どもへの直接サービスを行っています。一般の児童図書館とは異なり、国立図書館として全国の子どもたちへのサービスにつながるように、広く学校図書館・公共図書館のモデルとなる事業をお示しすることを心がけています。今後強化していきたいと考えているのが、中高生（ヤング・アダルト）向けサービスです。新館建設を機に平成二十八年（二〇一六）には、中高生向けの調べものに役立つ資料約一万冊を開架した「調べものの部屋」をオープンし、図書館を使った調べ物の方法等を中高生に学んでもらう体験プログラムも始めました。

第三に、子どもの本のミュージアムとして、児童書の展示会を通じ子どもの本の魅力を伝えるための活動を行っています。明治以降の日本の子どもの本の歩みをたどる展示を「児童書ギャラリー」で常設するほか、「本のミュージアム」において企画展を年四～五回開催します。今年は、現在開催中のオランダ児童書展に続き、国際児童図書評議会（ＩＢＢＹ）推薦バリアフリー児童図書展、児童雑誌『赤い鳥』創刊百年記念展等を開催する予定です。ミュージアム機能は、通常の図書館にはない独自の役割であり、力を入れていきたいと考えています。

子どもの本は、ヴィジュアル的に美しく、大人が見てもわくわくさせられるものが少なくありません。上野にお出でになった際は、是非一度国際子ども図書館にお立ち寄りください。現在でも、建築が素晴らしいこともあり（レンガ棟は東京都の歴史的建造物に選定）、幅広い層の方が訪れてくださっていますが、一層おしゃれで魅力的な場所として多くの方に来ていただけるよう鋭意努めていく所存です。今後ともよろしく御支援くださいますようお願いいたします。

国立国会図書館
国際子ども図書館長
寺倉 憲一
（てらくら・けんいち）

筆者略歴

一九六二年愛知県生まれ。東京大学法学部卒業。八七年国立国会図書館入館。調査及び立法考査局文教科学技術調査室主幹、同次長等を経て現職。専門は、高等教育政策、文化・学術法。最近の論文に「米国の奨学金政策をめぐる最近の動向」『レファレンス』七七五号（平成二十七年八月）等がある。比較教育学会、日本ドイツ学会、日本文化政策学会会員。

感謝の心をもって 復興・再生の道を歩む

悪夢のような東日本大震災から七年。
多くの尊い人命と財産を失った陸前高田市。
貴重な文化財も例外ではなかった。
初当選し、就任直後に直面したこの未曾有の
大震災に市長はどう対応したのだろうか……。

陸前高田市長
戸羽 太
（とば・ふとし）

巨大地震による甚大な被害の中で

東日本大震災の発生以来、公益財団法人　文化財保護・芸術研究助成財団における被災した文化財の修復に向けてのご支援につきまして、改めて心より感謝申し上げます。

平成二三年三月に発生した東日本大震災により、本市では多くの尊い命や貴重な財産を失うとともに、市街地をはじめ市内各地で壊滅的な被害を受けました。

その被害は市内に所在した四つの文化財関連施設にも及びました。

考古・民俗・歴史など約二三万点もの様々な資料を有する「市立博物館」、約八万冊の書籍を所蔵する「市立図書館」、陸前高田市出身の博物学者　鳥羽源藏と千葉蘭児のコレクションを含む約十一万点の貝類標本を有する「海と貝のミュージアム」、市内の遺跡発掘調査で出土した遺物や関係資料等約十四万点を保管していた「埋蔵文化財保管庫」、これら四つの施設に所蔵・保管されていた約五六万点の貴重な文化財は、あの大津波によってすべて呑み込まれてしまいました。

こうした中、岩手県教育委員会、岩手県立博物館をはじめ多くの関係機関の連携のもと、文化財レスキュー事業が展開され、被災から三ヵ月弱で約四六万点の被災資料を救出することができました。

救出した被災資料は、長期に渡り安定的に保管可能な状態にするための安定化処理作業が必要となります。多種多様な素材からなる膨大な被災資料の処理方法については、国際的にも未確立のため試行錯誤の連続となっております。すべての安定化処理が完了するまでには、まだまだ長い時間が必要となりますが、陸前高田市の歴史を守り未来へ継承していくために、関係機関と連携しながら継続して取り組んでいく必要があります。

また、救出した被災資料のうち、約三〇万点は市内の閉校となった旧生出（おいで）小学校へ移送いたしました。かつての校舎は、博物館施設としての環境整備を実施しています。ここで保管した被災資料は安定化処理、経過観察等を行っています。

旧生出小学校が、市立博物館として大震災の記録を留める資料館としての役割もになっていくことになると思います。

2年の歳月を経て太平洋を横断。アメリカに漂着した「実習船かもめ」の返還式（2013）

市庁舎、図書館、博物館等々、海辺の公共施設は壊滅的な被害を被ったが、人々の地道な努力によって一歩、一歩、復興への道を歩んでいる

震災によって育まれた「縁」と「交流」

私たちは、震災により多くの大切なものを失いました。しかし、震災がきっかけとなり、たくさんの縁や交流が生まれました。

震災がきっかけで生まれた交流の一つに、流出した県立高田高等学校所有の「実習船かもめ」の漂着による、奇跡的な友情の物語があります。

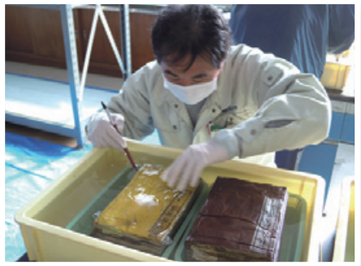
「実習船かもめ」は、平成二五年四月に米国カリフォルニア州クレセントシティ市に流れ着き、現地デルノーテ高校の生徒による関係機関への働きかけにより、震災から二年七ヵ月後の同年十月に県立高田高等学校へ返還され、陸前高田市立博物館が寄託を受けました。

この「実習船かもめ」がきっかけとなり、両校において相互交流が生まれ、平成二九年二月には国際姉妹校となりました。

また、本年二月には、クレセントシティ市のインスコア市長をはじめとする代表団が来訪し、市をあげての歓迎会において、行政の枠を超え市民レベルでの交流を深めていきたいという両市の想いが合致し、国際姉妹都市提携へ向けて大きく前進しました。

そして四月には、本市の市民訪問団のクレセントシティ市訪問が実現しました。両市は、地形や過去の津波被害など共通しているところがあり、「実習船かもめ」がきっかけで生まれたこの縁は、偶然ではなく必然であったと改めて強く実感し、両市民の総意のもと、姉妹都市提携を締結したところであります。

震災により生まれたこの「縁」を大切にし、国内外の多くの皆様からのご支援への感謝の気持ちを忘れることなく、皆様と手を取り合って、復興へ取り組んでまいります。



津波により海水損した古文書類等の紙の文化財のレスキューは根気の入る丁寧な作業が要求されている

ふるさと再生をめざしての取り組み

被災文化財の再生は、陸前高田市の歴史の再生、ふるさとの再生であるとともに、陸前高田市の復興において、大変、意義深いものであると感じております。

震災により、慣れ親しんだ街の景色は全く変わってしまいましたが、被災文化財が再生し、市民の皆様が再び目にした時、心の中に、きっと、ふるさとの美しい情景がよみがえるのだと思います。

私たちは、震災の記憶とともに、過去の歴史や文化、そこに生きた人々の生活を風化させることなく心に刻み、後世に伝えていかなければなりません。

現在、本市では、高台部への住宅再建が進み、また、嵩上げ地の新たな中心市街地においては、商業の拠点となる市立図書館併設の大型商業施設「アバッセたかた」のオープンや、市民待望の運動拠点施設「夢アリーナたかた」が開館するなど、少しずつ賑わいが戻り、復興後の新しい街の姿が見えてまいりました。

未来にむけて

平成三〇年度は、震災復興計画の最終年度となりますが、一つでも多くの復興事業の完了を目指すとともに、今後におきましても、これまでの「縁」を大切にしながら、皆様の気持ちに寄り添い、子どもから高齢者まで誰もが活躍し、いきいきと笑顔があふれる「ノーマライゼーション」という言葉のいらない、魅力的な新しい陸前高田市の創造に向けて邁進してまいります。

結びとなりますが、文化財保護・芸術研究助成財団はじめ被災文化財の修復・保全にご尽力いただいております皆様に、心より御礼申し上げますとともに、今後とも当地域の文化財の保護、ふるさとの再生に向けて、特段のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

筆者略歴

一九六五年神奈川県生まれ。陸前高田市議を経て、二〇一一年の市長選に初出馬、当選。市長就任直後に東日本大震災により市は壊滅的な被害を受けたため、以後、精力的に復興にむけた新しい町づくりに取り組んでいる。

クローン文化財技術の顕彰と夢ふくらむ未来に寄せて

高い技術的評価と共に柔軟性に富んだ応用範囲で注目されるクローン文化財。
文科大臣表彰を機にその未来を検証する。

東京藝術大学美術学部教授
深井 隆（ふかい・たかし）

祝・文部科学大臣表彰

当、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団理事長で東京藝術大学名誉教授でもある宮廻正明さんが、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた人を顕彰する「科学技術分野の文部科学大臣表彰」の科学技術賞・科学技術振興部門で受賞なさいました。誠におめでとうございます。受賞理由として「高精細且つ質感まで再現する文化財復元技術の振興」とあります。簡単に言えば、宮廻さんが二〇一〇年に取得した特許技術などを用いて制作された超高精細復元・複製作品いわゆる「クローン文化財」の活用、振興で社会に貢献したことを表彰しますということです。またこの受賞に先立ち、昨年平成二九年度全国発明表彰「21世紀発明奨励賞」を受賞しているので、ダブル受賞という事になります。重ね重ねおめでとうございます。美術畑の人がこれらの賞を受賞されるのは本当に希有なことで、素晴らしいことです。

この「クローン文化財」を使用した展覧会は、二〇一六年東京藝術大学陳列館の「素心　バーミヤン大仏天井壁画～流失文化財とともに」をはじめとして、二〇一七年東京都美術館の「バベルの塔」や同年東京藝術大学大学美術館の「素心伝心　失われた刻の再生」などがあります。この「素心伝心」展につきましては、当広報誌「絲綢之路」二〇一七年秋号に東京藝術大学客員教授の前田耕作先生が詳しく寄稿していましたので、覚えていらっしゃる方も多いと思います。バーミヤンから敦煌を経て法隆寺に至るまでのシルクロードに関連する遺跡を「クローン文化財」を使って再現し展示したもので、四万人近い来場者に見ていただく事ができました。その他にも、大田区立川端龍子記念館収蔵、伝・俵屋宗達の襖絵、葛飾北斎の「富嶽三十六景」など、多くの制作を行ない展示発表しています。またバーミヤン天井壁画や法隆寺金堂壁画は二〇一六年G7伊勢志摩サミットで発表し、世界の主要国首脳に文化財の諸々の問題を提起することが出来ました。こういった数々の取り組みに対する評価という事なのでしょう。

バーミヤン東大仏天井壁画復元制作の仕上げに取り組む宮廻名誉教授

法隆寺金堂壁画制作

COIという新たな拠点

さて、東京藝術大学にはCOI（センターオブイノベーション）拠点というのがあります。企業と大学が連携して新しい起業を考えなさいという組織で、全国十七の大学に拠点があり藝大はその一つです。宮廻さんはこのCOI拠点の研究リーダーとして活動してきました。十七の拠点のなかでも、特に高い評価を受けています。この拠点が出来たことで「クローン文化財」の大きな展開が可能になりました。ここには、東京藝術大学の宮廻さんの教え子にあたる文化財保存学保存修復日本画専攻、加えて彫刻科、工芸科出身の研究者たちが、最新のデジタルプリントや3Dプリントで出力された美術品の原型に、手作業で彩色や加工を加えて質感までこだわった再現に挑んでいます。この藝大出身スタッフの才能が「クローン文化財」を支えているのです。COIのスタジオには視察や取材のために多くの来賓、報道メディアがいらっしゃいます。宮廻さんは、隠さずすべてをお見せします。それというのもこの手仕事の技術は、まねが出来ないという確信があるからなのです。

G7伊勢志摩サミット：G7首脳にクローン文化財について説明する宮廻名誉教授（2016年）

豊かな発想と共に

そもそも私と宮廻さんとは、年齢は一つ違いで、藝大で学生に教える立場になった者同士として長い間親しくさせていただいています。そばにいて何時も感じるのですが、発想力が素晴らしく、またそのアイディアを実現する実行力を持ち合わせていることに感銘を受けています。一つの例として、二〇〇五年に開校した映像研究科の設立があります。映画も愛する宮廻さんは、藝大にも映画をはじめとする映像教育の科が必要と考え大学に働きかけて実現させました。この時も、加わらせていただいたのですが、理想とする教育体制を徹底的に調べあげ、日本に最適な体制を構築しました。教育方針、教授のメンバーも公平で、世界のトップクラスの映像大学として、多くの若い映像作家を輩出しています。この行動力は「クローン文化財」を創りだし、それを基に文化政策を推進しているのと共通していることと思います。

さらなる進化の中で見る夢

最後に「クローン文化財」で何ができるのかもう一度確認してみたいと思います。

一、バーミヤンの天井壁画や、法隆寺金堂壁画のように失われたもの、また流失してしまい不明になった文化財を残された画像や資料から再現する。

二、劣化したオリジナル文化財を当初の状態に復元する。

三、優れた文化財を常時公開することによる劣化を防ぐために「クローン文化財」で替わりとする（実際、敦煌の壁画は観光客の増大による劣化が心配されているようです）。またこのことは観光産業を含めて多くの国に貢献することができる。

などが考えられます。これらのことは、当、文化財保護・芸術研究助成財団の創設者である、平山郁夫先生の思い描いていた、文化財の赤十字構想、文化の力で世界に貢献するという考えに近いものがあるのではと思います。どこかで、宮廻さんに受け継がれ、さらに発展されているように感じています。今後も財団の理事長として、もちろん本業の日本画家として益々の御活躍を期待しております。

筆者略歴

一九五一年群馬県高崎市生まれ。七六年東京藝術大学美術学部彫刻科卒。七八年同大学院芸術研究科彫刻専攻修了。現在、美術学部彫刻科教授。馬や、椅子、金の翼、林檎などをモチーフに主に木を素材に彫刻を制作している。二〇一三年に紫綬褒章受章。これまでに中原悌二郎賞優秀賞、平櫛田中賞、タカシマヤ美術賞等受賞。

まほろばの音を永遠に
――伝え続ける箏の音

古来より日本人の心を癒し、魅了してきた「箏」の響き。伝統の美しき音を未来に伝える夢を演奏の第一人者が熱く語る。

箏曲演奏家
深海 さとみ
（ふかみ・さとみ）

演奏家を志す

三歳から祖母に箏の手ほどきを受けておりました私は、幼い頃から〈藝大→大学院→演奏家〉の道を志していました。

私の祖母、深海澄子は幼少時から九州で箏・三絃と共に生きていた演奏家であり、師匠でもあり、芸一筋に生き抜いた人生の先輩です。ご縁あって、当時新日本音楽として脚光を浴び始めた宮城道雄（一八九四～一九五六）先生の門人となり、宮城会発足の一助となり、九州地区代表として九州全体の邦楽発展の為に尽力しておりました。その祖母の姿を隣で常に見続けてまいりましたので、自然と演奏家になるという意志が固まっておりました。

人にはやさしく、稽古は厳しく。指導中の筆者（右）

五歳の時、宮城道雄先生が福岡にいらっしゃった折に、祖母に連れられて先生にお会いして、握手して頂き「東京にいらっしゃいね」と優しく言っていただいたのを子供心にとても良く覚えております。それからずっと先生の下である東京に行くんだ、と思っておりました。

七歳の時に箏の演奏家になることを決心しました。当時は両親と共に暮らしておりましたが、ある日、親に正座させられて「このまま私達といるか、それともお婆様のところで暮らし一生懸命箏の稽古をするのが良いか、どちらでも好きな方を言ってごらん？」と聞かれました。即座に私は「お婆様のところでお箏をやりたい！」と答えたのを今でもはっきりと覚えております。その後、小学生のうちに親元を離れて祖父母がいた福岡で一緒に住むようになり、祖母が演奏家として九州を回っている時、私もついて行き演奏にも加わる中で「私も箏の演奏家になりたい」と決意を新たにしました。

演奏家としての歩み

私が藝大受験する年は、ちょうど周りが優秀な受験生ばかりでしたから到底本科を現役で受かるとは思っておりませんでした。幸い宮城道雄先生の後継である宮城喜代子（一九〇五～九一）先生のご指導のお陰で現役で入学することができました。学生の四年間はとにかく周りについていくので必死でした。その後は大学院に進学しましたが、修了するときには「これでやっと試験としての演奏が終わって、これからは本当のプロとして演奏できる」という事がとても嬉しかった記憶が強く残っています。

大学院修了後は東京と福岡で一回目のリサイタルを開催しました。初回のリサイタルはがむしゃらに自分のやりたい曲を弾いたのですが、その後、毎年リサイタルを開催するにあたり各回にテーマを設ける事にしました。自分で企画していくと自ずと音楽性や方向性も見えていくものです。まず思い浮かんだのが藝大の卒業演奏会で弾いた『手事（てごと）』でした。『手事』という曲は宮城道雄先生の代表作でもある箏独奏曲で、技術・肉体・精神が一致しないと弾けない大変な難曲です。ただ弾くだけではなく色々な音を出したい、音色に変化を持たせたい、琴線に触れる音を一音でも出したいと思いリサイタルの度に取り上げました。それは後の「箏の音を探る」という生涯をかけて取り組むテーマとなりました。

藝大での指導

私は自身の弟子指導に加えて、本年の三月まで約二十五年間、藝大の非常勤講師及び准教授として、学生の指導育成に全力で取り組んでまいりました。

学生には将来演奏家になるための指導を心がけました。

また、新たな取り組みとして、宮城道雄先生の時代から続く箏曲生田流専攻に加えて、三年前から現代箏曲専攻を新設しました。これは大学や社会のグローバル化に対応して、海外において日本文化の分野で広く活躍できる人材を育成することを視野に入れた動きです。オーケストラのコンチェルトができるような箏の演奏家を翔たかせることを目指しています。ソルフェージュ能力や作曲など西洋音楽の素養も必要としながら、ただの楽器として箏を奏でるのではなく、箏曲の礎である古典音楽も心底に持つことで日本の心が伝わると考えて指導しております。藝大の両専攻から今後世界にはばたく箏曲演奏家を多く輩出できる事を願っております。

音色の探求と科研費挑戦的萌芽研究

先にも述べたように、自身の演奏活動を通して「音色」への拘りを持ち、常に満足することなく、日々様々な面から箏のより良い音、自身の音を探求し続けてまいりました。

藝大で准教授として教鞭を取る中でも、※科研費を獲得しての挑戦的萌芽研究「邦楽合奏における楽器配置に関する研究」は、藝大ならではの研究ができたと実感しております。これは、長年の課題であった、音響を最重要視しながら演奏者・聴衆の双方にとっての聴こえ方も見た目の印象も両方良くなる配置を探る研究でした。邦楽、特に箏曲における大合奏で、過去には限られた舞台スペースにより多くの奏者を配置する事や見栄えに重点を置いた配置の仕方が多く見られましたが、客席での聞こえ方・指揮者を置かない邦楽合奏の中での演奏者同士の息の合わせ方・低音の伝達の遅れなど課題は山積しておりました。この度は音響学の先生方や、多くの邦楽奏者に協力頂き、聞き取り調査や藝大奏楽堂での音響実験を実施しました。そこで得られたデータを元に成果発表として、実験と同じ場所である藝大奏楽堂に於いて私の退任記念演奏会を行いました。邦楽オーケストラとも言うべき大合奏形態での問題点の解決の糸口を示唆することができた事は、私自身の音色の追及にも有意義な事でした。

平成30年（2018年）3月18日、東京藝術大学奏楽堂における退任記念演奏会の模様

演奏中の筆者

現在は、大合奏の中でソリストとしてどのような音を求めるのか、という観点で立奏台の改良など、楽器に付随する物の研究にも着手しております。

後進の育成

藝大大学院修了以降も、指導者として多くの受験生を藝大に送りながら、教育研究助手・非常勤講師を経て常勤教員として教授活動をさせていただき、長年藝大と関わってまいりました。宮城道雄先生が発展に力を尽くされた藝大には、私も並々ならぬ想いがございます。学生には立派な演奏家として大成してほしいというのが一番の願いで、指導はプロの演奏家としての演奏技術のみならず、所作・出で立ち・心構えなど仔細にわたりました。

最後に、私が今日まで演奏・教授活動を通し大切に思う「五つのH」があります。

①Head　考える力、記憶する力
②Hand　技術
③Hear　音感、聞く耳を持つという事
④Health　心身ともに健康
⑤Heart　音楽を愛し、楽器を慈しむ心

以上の事を基本にこれからも自分の音楽創り、音作りに精進し、熱い心を持って後進の指導が出来る様、健康に留意し前向きに進み続けたいと思います。

筆者略歴

幼時より祖母深海澄子、のちに宮城喜代子（人間国宝）、宮城数江両師に師事。東京藝術大学卒業、同大学院修士課程修了。修了の年に第一回リサイタルを開催、以降毎年リサイタルを行う。一九八三年度文化庁芸術祭優秀賞、八六年松尾芸能賞新人賞、八七年度文化庁芸術祭作品賞、他受賞多数。二〇〇〇年よりシリーズ「古典を現代に」リサイタルにて、数々の古典作品の手付を行う。宮城社大師範・元東京藝術大学准教授・上野学園客員教授・コロンビア大学マスタークラス指導・深海邦楽会主宰・深海合奏団主宰。

※科研費：科学研究費助成事業とは日本の研究機関に所属する研究者の研究を発展させることを目的とする文部科学省と日本学術振興会が行っている事業。

財団30年の歩みを俯瞰する

文化による社会貢献、文化による世界平和への貢献。
この理念のもと財団が産声をあげて30年。
数々の事業の中でも心に残る事業をここに紹介。

財団参与
佐野 靖史（さの・やすし）

はじめに

公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の前身である、財団法人文化財保護振興財団の誕生をふり返ってみましょう。当時、世界各地の文化遺跡を旅されていた平山郁夫先生は、東京藝術大学敦煌学術調査団を組織して敦煌を訪れ交流を重ねておりました。そうした流れの中で、遺跡の保存協力の問題が浮上。これが日中政府間の文化協定に発展し、敦煌保存協力のため、財団法人文化財保護振興財団が、外務省、文化庁共管財団として、一九八八年六月一日に設立されました。その後、二〇〇四年四月一日に財団法人芸術研究振興財団を統合し、それに伴い名称を変更、現在の名称になりました。統合により事業の範囲も文化財保護に芸術研究が加わって十四年になります。

敦煌莫高窟の第45窟を取材中の平山理事長（1999年6月）

今年は前身の財団設立から三〇年の節目の年を迎えます。この間の一番の出来事は、文化財の保護で平和を守る「文化財の赤十字」構想を柱にさまざまな計画や事業を立案されてこられた、平山郁夫理事長が二〇〇九年十二月二日に亡くなられたことだと思います。今回は、平山郁夫先生に関する事業を中心にこの三〇年を俯瞰してみたいと思います。

ユネスコ親善大使としての貢献に対し、ユネスコより感謝状を受ける平山理事長（左は松浦晃一郎事務局長。2009年5月）

敦煌研究院

敦煌の莫高窟の保存事業への協力は、財団設立の重点事項になりました。協力事業として、これまで、平山先生の協力で東京藝術大学で敦煌研究院の研究員を招致されていましたが、財団が設立されてからは、財団事業として東京藝術大学を受け皿とした研究員の受け入れが、一九九〇年度から始まりました。これにより遺跡の保存、修復の専門家が育成されて、敦煌研究院において保存事業の要の人材になっていると思われます。この事業はこれからも継続されていきます。政府間の文化協定により、日本政府の支援により一九九二年には敦煌石窟文物保護研究陳列センターが建設されました。財団も研究機材や給水設備資金の提供を行い、一九九九年度に提供した「微小部付全自動X線回折装置」は壁画の状態や顔料の研究に適合した精密機器で、壁画の保存修復の研究拠点として充実が図られたと思います。敦煌研究院は二〇一四年に創立七〇年を迎え記念式典が行われました。その時、平山先生への感謝が述べられ、東京藝術大学と財団に感謝状が贈られました。

アンコール遺跡の保護

アンコール遺跡の保存修復協力をユネスコ親善大使である平山先生が国際的に呼びかけ、日本では官を含むアンコール遺跡救済委員会が一九九一年四月に発足し、国際協力について検討が行われました。この組織は内閣府に連絡協議会が設置されたことにより、解散いたしましたが、財団は人材派遣、人材招聘などへの助成に始まり、一九九五年に日本政府によるアンコール遺跡保存修復計画が確定しアンコール・トムのロイヤルプラザ、プラサート・スープラ、バイヨンの北経蔵、アンコールワット外周壁内北経蔵が対象になったのに対し、財団は、政府関係事業を側面から援助を行うこととし、遺跡保存修復を行う日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）への援助として人材養成等への助成を行いました。

高句麗壁画古墳群の世界遺産登録

一九九七年十月に平山先生を団長とする高句麗古墳調査学術代表団が朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）を訪れました。平山先生はユネスコ親善大使であると同時に文化遺産担当ユネスコ事務局長特別顧問でもありました。高句麗壁画古墳群のユネスコ世界遺産登録のための基礎データの収集が調査の目的でした。それにより古墳を保存修復するデータを得るための温湿度モニターセットをユネスコを通じて贈ることになりました。二〇〇一年七月に平山先生の招聘による五名の北朝鮮訪問団が訪日し、日本の文化財保護の最新技術等について各施設を見学しました。また、朝鮮の文化と美術に深い関係にある奈良の寺院にも訪れました。

財団も訪日に際し、高句麗壁画古墳保護並びにユネスコ文化遺産登録支援のための機材の提供を行いました。古墳群は二〇〇四年に世界遺産に登録されました。

アフガニスタン流出文化財の保護と返還

アフガニスタンのバーミアン大石仏が二〇〇一年三月イスラム原理主義勢力タリバーンによって爆破されました。平山先生は各国博物館等の館長との共同声明やタリバーン幹部への説得をしていましたが、爆破され衝撃をうけました。首都カブールの博物館も壊滅的な被害を受け文化財は散逸しました。同年六月、平山先生はユネスコの同意をえて「流出文化財保護日本委員会」を立ち上げ、戦乱で国外に流出し日本に入ってきたアフガニスタンの文化財を「文化財難民」として、保護に乗り出しました。賛同頂いた方々から多くの文化財を提供いただき保護することが出来ました。これらの文化財はアフガニスタンに平和が戻り、安全な状況になったことを見届けて同国に返還するとしておりましたが、その時が訪れるには時間がかかりました。二〇一五年五月にアフガニスタンの情報文化大臣から委員会に返還に関しての様々な要請があり、その結果、日本で開催される、特別展「黄金のアフガニスタン―守りぬかれたシルクロードの秘宝―」に合わせての返還となりました。四月十二日から東京国立博物館で開催された特別展には流出文化財の一部も展示されました。返還される一〇二点の文化財の返還式は、東京国立博物館の大講堂で行われ、宮廻正明委員長（財団理事長）とアフガニスタンのザルダシュト・シャムス情報文化省副大臣が合意書に署名し返還になりました。

完成間近の大唐西域壁画の第5号壁「バーミアン石窟・アフガニスタン」の前で失われた大石仏の「顔」を平山流復元で描いてみせる（2000年）

海外の文化財保護については、まだありますが、国内では、文化財保護や芸術研究等への助成事業を行っていますが、現在も継続中の事業を紹介いたします。

尼門跡寺院文化財保存修復事業

この事業は、外国人研究家が美智子皇后陛下に尼門跡寺院の文化財の保護をお願い申し上げたことから、平山先生にその旨が伝えられたことがきっかけとなり、始まりました。二〇〇〇年度から始まった事業は、篤志家や企業等のご協力で継続しております（事務局報告をご参照ください）。

北朝鮮の高句麗古墳群の徳興里古墳内部を調査中の平山理事長（1997年10月）

妙高夏の芸術学校

美術思想家で東京美術学校の校長でもあった岡倉天心（覚三）は終焉の地となった、妙高市赤倉を「東洋のバルビゾン構想」の地として考えていました。平山先生は、その考えに共鳴し「妙高バルビゾン構想」を推して、妙高市の協力で一九九六年に「妙高夏の芸術学校」が誕生しました。統合した財団法人芸術研究振興財団が共催としていましたが、継続し、講師は東京藝術大学や日本美術院関係の先生方にお願いし、開設から二三年になります。

※　※　※

国内事業では、この三〇年の間に阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震等の災害が発生し建物を含む多くの文化財が被害を受けました。財団は文化財レスキュー活動に助成を行うなどして、文化財の修復に協力して参りました。また文化庁の協力による募金を行うなど、多くの方のご協力をいただきました。財団はこれからも平山先生の理念である文化で平和を守る「文化財の赤十字」を基に活動を行ってまいります。さらなるご支援をお願い申し上げます。

妙高夏の芸術学校も本年で23年目となる。開会式で名誉校長として挨拶する宮廻正明理事長（2017年7月）

定款第4条の定めに従い、次の事業を行いました。

平成二十九年度事業報告

■文化財保存修復助成事業

国内文化財の保存修復事業助成として、27都道府県教育委員会から推薦のあった61件の中から、25件について助成を行いました。

（敬称略・以下同）

（美術工芸）

①岩手県・藤勢寺
木造阿弥陀如来立像修理事業

②山形県・善光寺
木造伝長井時広夫妻坐像修理事業

③神奈川県・宝金剛寺
絹本著色真言八祖像保存修理事業

④石川県・永福寺
紙本著色奥村永福夫妻画像保存修復事業

⑤福井県・毫攝寺
光明号本尊修理事業

⑥京都府・籠神社
籠神社文書保存修理事業

⑦奈良県・十市町自治会
正覚寺蔵木造大日如来坐像保存修理事業

⑧高知県・北寺
木造天部立像（2軀）保存修理事業

⑨福岡県・大興禅寺
如意輪観音坐像保存修理事業

⑩佐賀県・玉林寺
無著妙融像一躯保存修理事業

⑪長崎県・東漸寺
木造不動明王立像保存修理事業

長崎県・東漸寺
木造不動明王立像
（修復後）

⑫大分県・臨済寺
十一面観音菩薩立像保存修理事業

大分県・臨済寺
十一面観音菩薩立像
（修復後）（修復前）

（建造物）

⑬群馬県・子持神社
子持神社保存修復事業

⑭千葉県・玉崎神社
玉崎神社本殿・拝殿保存整備事業

⑮東京都・馬場克己
馬場家御師住宅保存修復事業

⑯長野県・長国寺
長国寺開山堂保存修理事業

⑰静岡県・宝林寺
宝林寺山門保存修理事業

⑱滋賀県・阿自岐神社
阿自岐神社本殿保存修理事業

滋賀県・
阿自岐神社本殿
（修復後）

⑲大阪府・牧方市
田中家住宅・鋳物工場主屋耐震・改修工事事業

⑳兵庫県・西仙寺
西仙寺熊野権現社保存修理事業

㉑鳥取県・斎藤信子
小川家住宅保存修理事業

㉒香川県・猪熊全徳
猪熊家住宅保存修理事業

香川県・猪熊家住宅
（修復前）（修復後）

㉓愛媛県・伊豫稲荷神社
稲荷神社楼門保存修復事業

（有形民俗）

㉔岐阜県・松竹軸修復委員会
大垣祭曳山（松竹軸）保存事業

大改修を終えた「松竹軸」

（在外研究員）

㉕保存修復家・宮城加奈子
ガラスを素材とする美術作品の実践的修復研修

■芸術研究等助成事業

文化財の保存修復及び芸術に関する調査研究、成果の発表、国際交流事業の実施等に対する助成事業として申請のあった25件の中から、12件の事業に助成を行いました。

①アジア音楽祭２０１７　ＡＣＬスペシャルイベント（東京藝術大学　副学長　演奏芸術センター　教授　松下　功）

②東京藝術大学１３０周年記念　能楽公演特別展　藝「大」コレクション展　パンドラの箱が開いた！（東京藝術大学　音楽学部楽理科　教授　植村幸生）

③Japan-China Textile Arts Exhibition（東京藝術大学　美術学部工芸科　准教授　上原利丸）

④和楽の美　源平の盛衰　～有為展変賦～（東京藝術大学　音楽学部邦楽科　教授　小島直文）

⑤新出・曾我二直菴印「架鷹図屏風」の自然科学的基礎研究（金沢美術工芸大学准教授　荒木恵信）

⑥佛教大学四条センター　パネル展（公開講座「仏像鑑賞余滴」連動企画）：展示名「平山郁夫シルクロード美術館に眠る西域壁画断片」（佛教大学　総合研究所特別研究員　熊谷貴史）

⑦イタリア中部地震で被災した文化財建築の保護に関する研究（名古屋市立大学芸術工学研究科　教授　青木孝義）

⑧黛敏郎メモリアルコンサートVol.2, Vol.3（オーケストラ・トリプティーク　ライブラリアン　青島佳祐）

⑨特集展示「藝大コレクションの修復―近年の取り組み」（「藝「大」コレクション　パンドラの箱が開いた！」展の特集展示）（東京藝術大学　大学美術館　学芸研究員　桐島美帆）

⑩萩岡松韻の世界　連続公演（東京藝術大学音楽学部邦楽科　教授　萩岡松韻）

⑪外国人研究者招致（ウィーン大学名誉教授）（東京藝術大学　社会連携センター客員教授　井上隆史）

⑫国際会議出席（シルクロード学研究会出席）（帝京大学　文化財研究所　教授　山内和也）

■国際協力事業

文化財の保護及び芸術文化に関する国際的な協力・交流、人材養成事業など申請のあった13件の事業の中から、6件の事業に対して助成を行いました。

①敦煌研究院より研究員招致（程　博氏）
平成29年4月1日～平成30年3月31日
（敦煌研究院院長　王　旭東）

②敦煌研究院より研究員招致（岳　阳氏）
平成29年10月1日～平成30年9月30日
（敦煌研究院院長　王　旭東）

③中央アジアにおける交通網と集落の形成に関する人文地理学・考古学的研究
―キルギス共和国を事例として―（帝京大学文学部　史学科　専任講師　筒井　裕）

④ファヤズ・テペ遺跡出土仏教壁画の保存修復（奈良文化財研究所　国際遺跡研究室　アソシエイトフェロー　影山　悦子）

⑤日本と西洋、伝統的彫刻とその修復技術の国際交流事業（東京藝術大学　大学院美術研究科　教授　籔内佐斗司）

⑥トルコ共和国古代遺跡出土遺物、遺構の保存、修復と若手専門家の養成（（公財）中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所長　大村　幸弘）

■重点助成事業

⑴熊本地震被災文化財救援・修復支援事業

熊本地震により被災した文化財の救援と修復のために募金（寄付）にご協力いただき誠にありがとうございます。支援事業は、5年計画の2年目になります。平成28年度から実施した文化財レスキュー活動への助成は終了し、個別の被災文化財への修復支援を始めるところですが、募金額の残額等を勘案し、また文化庁及び熊本県と協議中であることから平成29年度は休止することとしました。

○平成29年度募金（寄付）受入状況
受入件数　38件
受入金額　1、086千円

⑵尼門跡寺院文化財保存修復助成事業

東芝プラントシステム株式会社の支援により、尼門跡寺院文化財の保存修復事業に対して助成を行いました。（修復継続中）

①宝鏡寺門跡四体のうち「仙寿院御像」の修復（真如寺）

木造月鏡軒坐像の修復
（平成28年度事業）
（修復後）（修復前）

⑶松尾大社本殿等保存修復支援事業

松尾大社本殿並びに神庫・楼門修復及び神域内の諸整備事業を行い、貴重な文化遺産を後世に守り伝えるための事業。3カ年計画の第Ⅱ期事業として松尾大社に次の助成を行いました。

①本殿内陣　御神宝修復
②神庫御屋根檜皮葺替
③本殿内陣　御帳台御障子修理

⑷その他（東日本大震災被災文化財救援・復旧支援事業）

被災文化財の救援と復旧のために募金（寄付）にご協力いただき誠にありがとうございます。本事業は平成24年度から5年計画で実施し、平成28年度末をもって終了としたところでありますが、引続きの助成要望及び募金受入もあることから平成29年度も助成を行いました。申請のあった22件の中から審査の上、16件に助成を行いました。

（建造物）

①岩手県（国登録）・盛合　光徳
「盛合家」復旧・復元修理事業

②岩手県・陸前高田市　市長　戸羽　太
「吉田家住宅」復元事業

③岩手県・菊池　長一郎
東屋土蔵復旧・復元修理事業

④宮城県・大沼　所左衛門
大沼家別荘修理工事

⑤宮城県（国登録）・気仙沼風待ち復興検討会代表理事　菅原　千栄
気仙沼内湾地区国登録文化財等復興事業（三事堂ささ木修復事業）

⑥宮城県（国登録）・気仙沼風待ち復興検討会代表理事　菅原　千栄
気仙沼内湾地区国登録文化財等復興事業（武山米店修復事業）

⑦福島県（国登録）・矢吹　友市郎
矢吹家住宅震災復旧事業

⑧福島県（国登録）・阿部　寛
なかむらや旅館第4期震災復旧工事

⑨福島県（国登録）・加藤　治
「花水館　奥の間（御殿）」震災復旧事業

⑩福島県（国登録）・大谷　芳江
栃窪簡易郵便局　土蔵等修復工事

⑪福島県・阿部　和永治
「福島市景観１００選」蔵保存修復事業

⑫福島県・藤田　彌五兵衛
藤屋建造物群③蔵屋敷修復事業

⑬茨城県・雷神社宮司　増渕　堯美
雷神社本殿・幣殿・拝殿保存修復事業

茨城県・雷神社本殿
（修復後）

宮城県・三事堂ささ木
（修復後）

（無形民俗）

⑭岩手県・東前青年会会長　佐野　貴政
東前太神楽による備品等整備事業

手鉦

半纏

⑮岩手県・金澤神楽保存会代表　大久保正人
金澤神楽による備品等整備事業

金澤神楽
装束を身につけた
子どもたち

⑯岩手県・中村・青ノ木郷土芸能研究会代表　及川　春男
中村熊野神社神楽による備品等整備事業

■シンポジウム等の開催事業、その他普及広報活動

文化財の保護及び芸術振興に関する啓蒙活動、国際交流、広報活動として広報誌の発行、文化交流フォーラムの開催、その他普及広報活動に関連し次の事業を行いました。

①広報誌「絲綢之路」の発行

第84号（二〇一七夏）　平成29年6月26日発行
第85号（二〇一七秋）　平成29年10月16日発行
第86号（二〇一八新春）　平成30年1月25日発行
発行部数：各2、０００部
配布先：都道府県教育委員会、美術館・博物館、文化財研究機関、芸術系大学、新聞社、支援者、賛助会員、理事・評議員、その他関係者に配布

②文化財保存修復支援カレンダー基金の募金活動（二〇一八年版カレンダー）

募集期間：平成29年9月～平成30年1月
製作題材：出光美術館所蔵「伴大納言絵巻」現状模写作品（6年目）
募金応募件数：1、476件（募金額5、660、946円）

③第13回日中韓文化交流フォーラムの開催

期間：平成29年11月1日㈬～4日㈯
会場：韓国（江陵市）
行事：第13回日中韓文化交流フォーラム
テーマ：「日中韓オリンピックと東アジアの文化芸術交流」

日・中・韓の代表団の方々

④「第22回妙高夏の芸術学校」の共催

主催：妙高夏の芸術学校実行委員会
共催：（公財）文化財保護・芸術研究助成財団、新潟日報社、妙高市他
期間：平成29年7月27日㈭～7月30日㈰
参加者：日本画（22名）油彩画（19名）水彩画（16名）デッサン・スケッチ（4名）小学生（4名）計65名

⑤第68回社会を明るくする運動「～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～」に協力

主催：〝社会を明るくする運動〟中央推進委員会他

⑥講演会・シンポジウム・展覧会等の後援

㈠第12回「文化財保存・修復―読売あをによし賞」を後援
主催：読売新聞社
後援：文化庁、大阪府教育委員会、独立行政法人国立文化財機構
㈡文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム「東南アジアの歴史的都市でのまちづくり―町の自慢を、町の魅力に―」を後援
主催：文化庁、文化遺産国際協力コンソーシアム他
後援：外務省、東京文化財研究所他
㈢セミナー「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」を後援
主催：特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
共催：東京国立博物館
後援：公益財団法人 日本博物館協会、一般社団法人 文化財保存修復学会他
㈣東日本大震災復興支援文化財保護レスキュー救済活動チャリティー企画　第19回「文化人・芸能人の多才な美術展」～広げよう文化の輪・芸術は地球を救う！～を後援
主催：特定非営利活動法人 日本国際文化遺産協会　文化人・芸能人の多才な美術展実行委員会　富岡市
後援：文化庁、公益財団法人 日本ユネスコ協会連盟他
㈤「宮城アール・パレ展」を後援
主催：アール・パレ展実行委員会

二十九年度ご支援いただきました賛助会員の皆様

法人正会員（二十社）　【五十音順】

朝日生命保険相互会社
株式会社 NHKエンタープライズ
株式会社 NKB
鹿島建設 株式会社
株式会社 講談社
株式会社 集英社
全日本空輸 株式会社
株式会社 髙島屋
株式会社 竹中工務店
株式会社 電通
東京ガス 株式会社
株式会社 東京ドーム
トヨタ自動車 株式会社
日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
野村ホールディングス 株式会社
有限会社 丸栄堂
三井住友海上火災保険 株式会社
株式会社 三井住友銀行
株式会社 三越伊勢丹
株式会社 ミロク情報サービス

法人維持会員（十一社）　【五十音順】

大塚ホールディングス 株式会社
洲本観光 株式会社
株式会社 精養軒
宗教法人 全昌院
大日本印刷 株式会社
大和建設 株式会社
株式会社 東京マルイ美術
株式会社 なとり
はぁーとふるふぁんど委員会
浜名梱包輸送 株式会社
株式会社 横井春風洞

賛助会員ご入会とご寄付を頂きました皆様

●平成29年12月21日から平成30年5月20日まで
敬称略／順不同

☆賛助会員
○個人（正）会員（氏名／住所）

☆寄付金

○文化財保存修復・芸術研究等助成事業に対する寄付

ヤフーネット募金（456名様）
文化財保存修復支援カレンダー募金（公社）日展
JOBANアートライン協議会
共同印刷（株）

○尼門跡寺院文化財修復助成事業に対する寄付

東芝プラントシステム（株）

○松尾大社本殿等修復支援事業に対する寄付

平成の御遷宮奉賛会（57件）

○東日本大震災被災文化財救援・復旧支援事業に対する寄付

アート好きによるアート好きのための図録放出会

○熊本地震被災文化財救援・修復支援事業に対する寄付

お願い

◎熊本地震被災文化財の救援と復旧のための募金のお願い

平成二十八年四月に熊本県を中心に発生した熊本地震により被災した文化財の保全に向けて、募金活動を行っております。

いただきました浄財は、熊本地震被災文化財レスキュー事業等、被災地域の文化財の救援のために活用（平成二十八年度助成実施）させていただくとともに、文化庁・熊本県と協議の上、被災文化財の修復・保存のために活用させていただきます。

皆様の温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

募金のお振込み手続きは左記の銀行振込又は郵便振替によりお願い申し上げます。

＊

銀行振込（①銀行名②口座番号③名義）

① 三井住友銀行　上野支店
② 普通　8399622
③（公財）文化財保護・芸術研究助成財団

※銀行振込の場合、振込者の確認が難しいため、領収書、お礼状の発行等の必要上、財団事務局に事前にご連絡をいただけると幸いです。

（電話：〇三・五六八五・二三一一）

郵便振替（①振替番号②加入者名）

① 00160・5・12319
②（公財）文化財保護・芸術研究助成財団

※通信欄に「熊本地震」とお書きください。

◎賛助会員ご入会及びご寄付（前記のご寄付を除く）のお願い

〈賛助会員〉

当財団では、財団の活動趣旨にご理解、ご賛同をいただき、恒常的にご支援いただける法人、個人の賛助会員を募集しています。

法人正会員　年額（1口）　50万円
個人正会員　年額（1口）　1万円
維持会員　年額（1口）　10万円

〈ご寄付〉

賛助会員の他に、ご寄付も随時受け付けています。ご寄付には次の様々な方法があります。

⑴銀行振込又は郵便振替

銀行又は郵便局から、振込によるご寄付を受け付けています。

（銀行振込）

○三井住友銀行　上野支店
普通 6615500
○みずほ銀行　上野支店
普通 4478576
○三菱UFJ銀行　上野中央支店
普通 0796384

（郵便局から振込み）

○郵便振替
00160・5・12319

※口座名義は、銀行、郵便局、いずれも（公財）文化財保護・芸術研究助成財団

⑵インターネットによるご寄付

次の手順によりインターネットから、ポイント又はクレジットカードによるご寄付（募金）を受け付けています。

←○「YAHOO！JAPANネット募金」
←○「文化・スポーツ」
←○「文化財保存修復支援募金」
←○「Tポイント」又は「クレジットカード」を選択
←○ 募　金

⑶特定寄付信託

当財団は、みずほ信託銀行と特定寄付信託に関する契約を締結しています。寄付信託に関する詳細につきましては左記にお問い合わせください。

○みずほ信託銀行個人営業推進部
電話：03・3274・9203

⑷遺贈

「遺贈」による寄付・相続財産の寄付を承っております。

「遺贈」とは、遺言により、ご自分の財産を特定の人や団体に分け与えることをいいます。受取人として、法定相続ではなく遺言書により、一部またはすべての財産の受取人として、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団をご指定いただくことができます。財団に寄付をされた場合、相続税の控除を受けることができます。

遺贈をご検討いただく際は、お電話かメールにて当財団までご相談ください。

⑸商品券・図書券等による寄付

ご家庭のタンスや事務室の机等の中で眠っている、未使用の商品券、図書券、切手、収入印紙、ビール券、お米券、旅行券、QUOカード、テレホンカード、書き損じ葉書等もご寄付として受け入れております。

お送りいただく場合は、当財団事務局宛てに封書にてご郵送下さい。

＊＊＊＊

●税法上の優遇措置

当財団は、「公益財団法人」としての認定を受けておりますので、寄付金には税法上の優遇措置が適用され、所得税、法人税等の控除が受けられます。詳しくは当財団ホームページでご確認いただくか事務局までお問い合わせください。

今号の表紙

平山郁夫　緑韻醍醐三宝院

緑韻醍醐三宝院 2004年

一介の足軽から成り上がり、ついに天下人となった太閤・豊臣秀吉の最後の華やかな舞台となったのが、ここ醍醐寺で開かれた「醍醐の花見」であった。慶長三年（一五九八）三月十五日のことである。五ヵ月後、秀吉は六十二歳を一期に波瀾に富んだ生涯を終えた。やがて豊臣家は滅亡した。

作品は本堂から茅葺屋根の純浄観越しに見た、秀吉が造園の指揮を執ったという池泉回遊式の庭園を描いたものである。

覇者の証とされる聚楽第から移した「藤戸石」は、今も池の南岸中央で、睨みをきかせている。

初夏、三宝院は、さわやかな緑に囲まれ、花見の季節とは打って変わって静寂な雰囲気が境内を支配している。

編集後記

財団事務局のある上野公園は初夏の光の中、緑あふれる木々に囲まれ、躍動感に満ちた季節を迎えております。明年のこの時期は、平成の御代が終わり、日本は新たな時代に入ります。上野公園に君臨する楠の大木は大きな時の変遷を何度見てきたことでしょうか。

時が移り、時代が変わっても、私たちの取り組んでいる仕事に変化はありません。大切な文化を守り、これを次の世代に無事、伝えてゆく。わが国の芸術文化の発展のために尽す。この二点に集約されます。

しかし、何事も言うは易し、行うは難しです。私たちも極力無駄を省き、本道を歩んでまいります。皆様におかれましても私どもの意をお汲みとりのうえ、一層の御支援・御協力を賜りますようお願いする次第です。

広報誌「絲綢之路」（シルクロード）
二〇一八年　夏号　通巻第八十七号
●
★平成三十年六月十八日発行
★編集発行／公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団　事務局©
〒110-0007 東京都台東区上野公園十二―五十
電　話（〇三）五六八五―二三一一
FAX（〇三）五六八五―五一二五
URL:http://www.bunkazai.or.jp/
E-mail:jimukyoku@bunkazai.or.jp
★印刷　株式会社 東都工芸印刷